

2011年(平成23年)6月28日

病院長からの一言

～附属病院正面駐車場完成～

弘前大学医学部
附属病院長 花田 勝美



まずは、東日本大震災で被害に遭われました方々ならびに関係者の皆様に対して心よりお見舞い申し上げます。被災者には本学の学生諸氏も含まれており、一日も早い故郷の復興を願わずにはられません。今回号は特にご報告することが多いのですが、内容の詳細はそれぞれの担当者にお願ひすることにいたします。3月11日午後2時46分、三陸沖で発生した未曾有の大地震の影響は附属病院にも及び、停電やそれに伴う診療制限による休診などの対応に追われました。一方で、本院からは「災害派遣医療チーム(DMAT)」に引き続いて、文部科学省の要請に応じて継続派遣されている「被災者状況調査チーム」や「石巻医療支援チーム」に、医師、看護師、診療放射線技師、事務職員がチー

ムを組み積極的に参加しております。加えて、岩手県遠野市、陸前高田市にも独自に診療科が診療あるいは調査の目的で積極的に現地に赴き医療活動を行いました。特に、本学が他に先駆けて被災者医療担当能力を備えていることが注目されております。これらの一連の支援活動に対しては文部科学省、被災された各大学病院からそれぞれ感謝の言葉をいただいております。厳寒の中、笑顔で出発されました



▲写真1 第1次石巻医療支援チームへの激励



▲写真2 遠隔操作型内視鏡下手術システム「ダ・ヴィンチ」

附属病院医療支援チームの皆様には大変なご苦勞をおかけしました。この場を借りて心より御礼申し上げます(写真1)。

4月28日、待ちに待った遠隔操作型内視鏡下手術システムが公開されました(写真2)。小さな術創、少ない出血、なによりヒト



▲写真3 附属病院正面駐車場完成記念式典。

右から、花田病院長、江羅財務・施設担当理事、遠藤弘前大学学長、宮本財団法人弘仁会理事長、佐藤大学院医学研究科長

ではできない精密な手術が期待できるロボットです。国内で18番目、東北・北海道では初めての導入で、研修医や若手の外科医等が弘前に集まることを期待しています。5月17日、附属病院正面駐車場完成記念式典が執り行われました。震災の影響で1ヶ月半

の遅れとなりましたが、これにより140台余の駐車スペースが広がりました。地下にも駐車スペースが確保され、これまでの病院前の渋滞緩和と降雪地域での緊急対応がスムーズに行われることを期待しています(写真3)。

(平成23年5月30日記)

脳神経外科 大熊洋揮科長と石巻医療支援チームが弘前大学表彰を受賞しました



▲表彰状を授与される大熊洋揮科長

5月31日、本学の教育研究活動や社会活動等において顕著な功績があった職員又は団体に贈られる弘前大学表彰の表彰式が行わ

れ、本院からは脳神経外科 大熊洋揮科長と石巻医療支援チームが受賞しました。

大熊科長は、一般市民に脳卒中の予防の重要性を新聞や市民公開講座をとおして啓発活動し、その活動が予防医学上果たす役割が極めて大きいことを高く評価され受賞。また、石巻医療支援チームは、約1ヶ月間継続して劣悪な環境の中、石巻市への医療支援活動を行ったことを高く評価され受賞し



▲チームを代表して表彰される石澤義也助教。表彰式では、遠藤学長から表彰状及び記念品が贈られました。

(総務課)

災害派遣医療チーム(DMAT)派遣

DMATは Disaster Medical Assistant Teamの頭文字をとったもので、「医師、看護師、業務調整員(医師・看護師以外の医療職及び事務職員)で構成され、大規模災害や多傷病者が発生した事故などの現場に、急性期(おおむね48時間以内)に活動できる機動性を持った、専門的な訓練を受けた医療チーム(DMATホームページより)」です。本学では現在医師5名、看護師5名、調整員2名が登録されています。3月11日14時46分の巨大地震の発生後、15時14分にはDMAT隊員の携帯に厚生労働省DMAT事務局から待機要請のメールが配信されました。副院長から出勤と携行薬剤調達許可をもらい、資機材や薬剤、個人装備を調べて午後7時に第1次隊(矢口医師、千葉医師、山内看護師、畑井看護師、木

村事務職員)が、集散地点である岩手医大に向かいました。二戸病院での病院支援を要請され二戸病院12日0時13分到着。久慈地区から患者が搬送されてくる予定も、道路の寸断により不可能と判明し、宮古病院へ移動。16時から停電中の宮古病院で多発外傷などの重傷者の診療、交代の当直勤務にあたりました。発災3日目の14日でもまだ孤立した集落などが残っており、その調査に2名が午前中参加。引き続き重症外傷患者を中心に診療にあたり、午後4時に宮古から出発。第2隊(花田医師、伊藤医師、上原子看護師、遠藤事務職員)が発災4日目15日午後から宮古病院での診療支援を引き継いだ。初めて道路が通じた山田地区からの油の混じった海水の誤嚥性肺炎などの重症患者を診療。夜間の当直待機の



後、翌16日には未だ誰も入っていない地区へのDMAT派遣要請を弘大が引き受けました。海上自衛隊のヘリで千鶴地区到着後、地区で医療を希望される方を診療(重傷者は既に自衛隊が搬送済み)、2名をヘリで宮古病院へ搬送した後で後続に引き継ぎ、弘大DMAT隊の活動を終えた。貴重な経験を積むことができ、サポートして頂いた大学病院・救命センターのスタッフの皆様へ感謝申し上げます。今回の震災で犠牲になられた方々、被災された方々に心より御冥福、御見舞いを申し上げます。(高度救命救急センター副センター長 花田裕之)

弘前大学被災者状況調査チーム派遣

(放射線部技師の派遣状況)



▲避難を前に放射線のチェックを受ける富岡町と川内村の住民。弘前大学チームがスクリーニング。

福島第一原子力発電所の事故により、弘前大学被災者状況調査チームは3月15日に第1次隊を、追って16日から2次、3次隊を派遣しています。放射線部の診療放射線技師によるサーベリングチームは16日の3次隊を皮切りに、5次、6次、10次隊がその任を終え、20次隊が7月末の派遣待機中です。延べ6名の診療放射線技師が参加しています。派遣先は、福島市、郡山市、いわき市、川俣町、丸森町と広域にわたり、福島第一原子力発電所から半径30kmの外側にある常設スクリーニング会場や避難所において、住民の方々の被災状況を調査しました。放射線部が関係した10次隊までで1500名程度のス

クリーニングを行っています。その後は甲状腺線量の測定、持込み物の野菜、ペット、車両等の線量測定を行いました。

また、3次隊派遣時期は水素爆発、ペント開放直後のため現地のバックグラウンド線量は弘前市の100倍程度あり、避難されている方々の被服には高線量の汚染も確認されました。調査チームは被服の着替え交換の指導、簡易除染の指導、屋外活動における諸注意等を交えたスクリーニングを行い、子供たちには内部被ばくを軽減する意味から手洗励行を助言、親御さんには靴やズボンの裾からの汚染拡大に注意を払うこと等を説明しました。住民の方々の社会復帰に幾らかはお手伝いが出来たと思っておりますが、それ以上に住民の方々の冷静で忍耐強い対応には敬服いたしました。ただ、このスクリーニングデータや地面の線量計測データが現地作業している他の方々や、住民の方々にリアルタイムで広報されていないことが残念です。

(放射線部 部長 高井良尋、技師長 藤森 明)

原子力災害現地対策本部に医師派遣

発災5日目、放射線医学総合研究所より電話があり、福島県緊急被災者医療調整本部の支援を依頼され、大学の了解を得た後、西崎医師と被災者医療調整本部床次教授とで福島県庁へ向かいました。同本部は発電所内で発生した傷病者の搬送・受入れ医療機関の調整や日本中から派遣されてくるサーベイ班の割り振りが主な業務でした。同日23時過ぎ、県庁の

前に老人施設からバスが到着。医師がいれば避難所で受入れ可能と県の職員より懇願され、翌日、帰宅予定の福井大学寺澤教授と西崎医師が同行し夜間の介護を担当しました。翌日、発電所内で傷病者が発生。自衛隊ヘリで福島県立医大に搬送することとなり、その調整作業に追われました。やっと一段落した頃、また、放医研より電話があり、オフサイトセンターOFCの医療班を手伝ってくれと。OFCは政府の原子力災害現地対策本部で、その担当者は法律で規定されているが災害で来ていません。放医研から派遣している医



▲福島県緊急被災者医療調整本部の様子

師を1日で良いから一度家に帰してやりたいと。そこで17日から19日の間、OFCの業務を担当しました。OFCは国の現地の窓口で、国と県の双方から多くの要請・依頼が集まってくる。例えば、県からは「ヨウ素剤が70万錠必要なのだが国が止めている、どうにかしてくれ」。厚労省からは「なぜ70万錠必要なのか?」、「配布の仕方は?」、外務省からは「外国人にはどうやって配布する?」。このようなやり取りが深夜2時くらいまで連日続きました。現在はOFCには厚労省担当官が常駐し各種業務を担当しています。この3日間は2度と経験できない貴重な体験でした。

(救急・災害医学講座 教授 浅利 靖)



て活動を行いました。

4月中旬の時点で一部地域はライフラインが整っておらず、高台から見た光景も凄惨なものでした。今回の震災は規模・範囲とも甚大で、復旧のためには長期間の

宮城県石巻赤十字病院に医師等派遣

初めに、この度の震災で被災された方々にお見舞い、お悔やみを申し上げます。

3月11日に発生した東日本大震災に対し、石巻赤十字病院が拠点となり石巻圏合同救護チームが組織されました。本部からの要請を受け当院からも石巻へ医療チームを派遣することとなり、私は第2次、第7次派遣隊として被災地へ赴きました。本部となった赤十字病院の被害は軽微でしたが、沿岸地域にある二次救急病院は直接

被害を受けており、搬送先はすべて赤十字病院という状況でした。本部は当該地域を14のエリアに分け、各避難所への巡回診療を行う方針としていました。我々は巡回チームの一員として、担当地区の診療、衛生状況の把握等を行いました。現場では重症患者は少ないことや精神的ケアの必要な方が多く見られたことなど、災害医療特有の難しさを感じました。当院は延べ1ヶ月間、当該地域におい

「大学の自治」という言葉が死語になりつつあります。社会に開かれ市井と大学との距離が縮まるほどに、大学のみがいつまでも天上天下唯我独尊を続けることは許されず、様々な外部規制によって行動に制限を設けざるを得ないのも時代の流れでということなのでしょう。特に、平成16年に施行された国立大学の独立行政法人化(独法化)移行後はますますその傾向が強まりました。本法施行によって大学の運営が中期目標中期

計画でもって第三者の評価を受けることになり、大学はその達成が至上命令となって、かつ評価そのものに一喜一憂しなければならぬ状況になってしまったからです。しかしながら、独法化の当初の趣旨は大学独自の運営を保証するものであり、その施行によって大学の独自性と飛躍が期待できるはずでした。ところが、現実はその反対方向へと向かいつつあり、本学の建学理念達成の手段である「深く専門の学芸を教授研究し、

先憂後楽

～副病院長の拜命に
当たって～



副病院長 水沼英樹

知的、道徳的および応用的能力を展開させる」ことすら困難な状況になりつつあります。専門的学芸の展開には、自由な雰囲気とそれを許す環境が不可欠です。多忙と人手不足によってそれが阻止されるようなことがあってはならないのに、事ある度にその嘆きが聞こえるのは残念でなりません。環境整備や医療機器の更新が一段落した今こそ、「人は城、人は石垣、人は堀」の精神に倣い、若い医師達がこぞって集まる病院に変貌さ

せて行くべきであると思います。数年前から本学では初期専門研修を外で受けた若い医師達の大学復帰が見られるようになり、今年度は40名もの医師が大学で専門研修を始めることになりました。彼らの夢を破り「仇は敵」とならないように、病院は怠ることなく環境改善と待遇改善を進めていく必要があります。北宋の忠臣范仲淹の故事に因んだ「先憂後楽」の意味をしっかりと胸に刻んで病院の発展に協力できればと思っています。

各診療科の紹介

【治験管理センター】



新しい薬は、世の中に出る一歩前の最終テストとして、ボランティアの患者さんに実際に使用され、その効き目や安全性が厳しく評価されます。この試験のことを治験と言います。治験は、患者さんの協力なくしては成り立ちません。今、病院等で患者さんに使われている薬も、先に治験に参加していただいた患者さんのご好意により生み出されたものです。

科学性・倫理性について、臨床研究審査委員会(IRB)による審査を受ける必要があります。IRBには、医学・薬学の専門家の委員だけではなく、患者さんの立場に立って審査できる、非専門家の委員、女性委員や院外専門委員も参加されており、各委員は、本院で実施される治験の質の向上・患者さんの安全性の確保のため、多大な労力を費やされています。本センターでは、IRBの円滑な運営を目指し、そのサポートを行っています。

治験では、質の高い結果を出すと同時に、患者さんの安全を最大限に確保する必要があります。治験管理センターは、早狩センター長を筆頭とする12名のスタッフが、科学的・倫理的かつ円滑に治験を実施するためのサポートを行っています。患者さん・治験実施者・治験依頼者の間を調整する要として、患者さんへの細やかなケア、治験実施者・治験依頼者への迅速・柔軟な対応を常に心がけて活動しています。

私たちは、「治験を通じ、次世代に優れた薬を残す」ことを目標に、日々活動しています。しかし、本センターはあくまでサポーターであり、その存在価値を発揮するためには、院内の治験実施アクティビティの向上が不可欠と思われる。皆さまの更なるご理解とご支援をよろしく願いいたします。

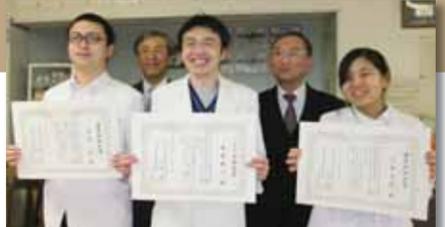
治験の実施にあたっては、その

(治験管理センター副センター長 板垣史郎)

平成22年度ベスト研修医賞選考会開催

平成22年度弘前大学医学部附属病院ベスト研修医賞選考会が、平成23年2月23日18時より医学部臨床小講義室で開催されました。本賞は平成16年度の卒後臨床研修必修化に合わせて創設された賞であり、今回が7回目を迎えます。

(この1年間臨床実習で研修医に間近に接してきた5年生が中心ですが、下級生も参加)による投票が行われ、廣瀬勝己先生が平成22年度ベスト研修医賞に選ばれました。引き続き表彰式が行われ、廣瀬先生に賞状、純銀製メダル、記念品が、大澤、富田両先生には優秀研修医賞として賞状、記念品が贈られました。その他にも各種特別賞として、西崎公貴先生に「ベストパートナー賞」、廣瀬勝己先生に「レポート大賞」、成田育代先生に「セミナー賞」、中田有紀先生に「グッドレスポンス賞」が贈られました。つづいて懇親会に移り、5年生から、今や恒例となった「ベスト指導医賞」



▲花田病院長、佐藤医学研究科長と共に。前列左より富田哲先生、廣瀬勝己先生(ベスト研修医賞)、大澤有姫先生。

当日は、あらかじめ卒後臨床研修センター運営委員会により優秀研修医にノミネートされた大澤有姫先生、富田哲先生、廣瀬勝己先生(いずれも二年次、五十音順)の3名の研修医が、「ここがポイント! 研修医の心がけ」と題して、この1年間の研修生活で自分が重視してきた点について、一人10分間ずつスピーチを行ないました。聴衆は学生および教職員で、スピーチのあと、学生諸君

の発表が本年も行われ、教職員も多数参加し盛会裏に終了しました。ベスト研修医賞は単に研修医のモチベーション向上に寄与するだけでなく、研修生活・臨床実習を通じて苦楽を共にしてきた研修医・学生間に、また学生の上下級生間にもきずなを重視した「弘大式屋根瓦教育」が定着するために、大きな役割を果たしているものと思われま。

(卒後臨床研修センター長 加藤博之)

平成23年度新体制スタート!

平成23年4月から副病院長に産科婦人科学講座 水沼英樹教授が、病院長補佐に総合医学教育学講座 加藤博之教授が就任しました。



副病院長
水沼 英樹
産科婦人科学講座 教授



副病院長
福田 幾夫
胸部心臓血管外科講座 教授



病院長補佐
藤 哲
整形外科講座 教授



病院長補佐
加藤 博之
総合医学教育学講座 教授



病院長補佐
砂田 弘子
看護部長

放射線治療装置(リニアック)更新について

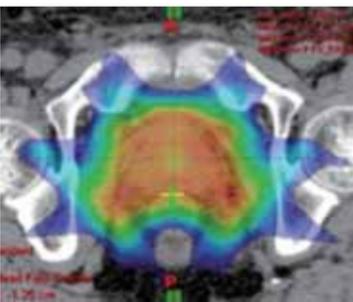
この度、附属病院の2台のリニアックが更新されました。

近年、高齢の癌患者が増加していることにより、体への負担が少なく機能、形態が温存され良好な生活の質を保つことが可能な放射線治療がその重要性を増してきております。「がん診療連携拠点病院」としての役割を求められている本院での放射線治療には、定位照射や強度変調照射などの高精度放射線治療が要求され、そのためには画像誘導装置など高度な機能を備えた新しいリニアックに更新することが重要な案件になっておりました。幸い、平成20年度がん診療連携拠点病院機能強化事業及びがんに係る放射線治療機器緊急整備事業によって本学にも2台分の



▲OBIを搭載したCLINAC-iX

リニアックの予算が付き、2台の三菱電機社製の古いリニアックをバリアン社の最高機種「CLINAC-iX」に更新が出来ました。新ライナックは平成22年11月に一台



▲前立腺癌への強度変調照射(直腸と尿道周囲の線量を低減している)

が稼働し、平成23年4月にもう一台が稼働しました。この新ライナック2台には、ともに画像誘導装置であるon-board imager(OBI)が搭載されており、1台には強度変調照射が2-3分で可能となる回転型強度変調照射システムのRapid Arcが備わっています。これらの優れた装置を用いることにより、早期肺癌の定位照射、頭頸部癌や前立腺癌への強度変調照射が容易に高精度で行えるようになり、青森県の高精度放射線治療のセンターとして大きな貢献が出来るものと考えております。これらの装置の導入に当たりご支援いただいた関係各位に心よりお礼申し上げます。

(放射線科・放射線部 高井良尊)

弘前大学医学部附属病院正面駐車場完成記念式典を開催

弘前大学医学部附属病院では、東日本大震災の影響により遅れていた病院正面駐車場の整備工事がこのほど完了し、正面駐車場が完成したことを記念して5月17日に式典を開催しました。



▲病院正面外観

完成記念式典では、花田勝美病院長の式辞、遠藤正彦弘前大学長の挨拶、上野泰弘施設環境部長から工事概要について説明があり、続いてテープカットにより駐車場の完成を祝い、関係者による駐車場見学が行われました。

完成した駐車場は、当初3月下旬に完成予定となっておりましたが、東日本大震災の影響により資材が不足したため、約1ヶ月半遅れでの完成となりました。地上

と地下に駐車スペースを有し、既存の駐車場と合わせると従来の収容台数から141台増の475台の収容が可能となり、これまで本院に入構するために混雑し、車道に自動車が列をなして走行車両や近隣住民からの苦情が寄せられていた問題の緩和につながる事が期待されています。(総務課)

【編集後記】

南塘だより第62号をお届けします。東日本大震災より3ヶ月が経ちました。震災直後より弘前大学から多くの職員が災害派遣医療チーム(DMAT)、被ばく状況調査チームで派遣されています。地震、津波、原子力発電所と多くの要素が複合された未曾有の災害であり、現在でも各地で余震が続いています。あらためて大自然の脅威と文明社会の脆さが窺われました。一方で復興作業は現在も進行中です。小生も何か出来ることはないかと日常生活を振り返り、まず節電、と必要性の低い電灯を消して、これからの夏の暑さへの対策をどうするか逡巡しています。一日も早い復興を祈念します。(広報委員 藤井 学)



▲式辞を述べる花田病院長



▲地下駐車場を見学する遠藤弘前大学長ら(左から江羅財務・施設担当理事、遠藤弘前大学長、佐藤大学院医学研究科長、花田病院長、千葉病院事務部長、上野施設環境部長)